



SDGsの
視点で見る
大学の学び



低学年次から、教育現場での 実習で「教育の今」を学ぶ

6つのコースと1つのプログラム（*1）が設置されている山梨大学教育学部では、教育への情熱と豊かな人間性を持ち、専門知識・技能を身につけた人材の育成を目指している。同学部幼小発達教育コース4年の窪田麗菜（れな）

私たちが紹介します



教育学部
幼小発達教育コース4年
窪田麗菜
くぼた・れな
山梨県立甲府南高等学校卒業。



教育学部
幼小発達教育コース4年
若林初夏
わかばやし・はな
静岡県立富士高等学校卒業。

多様な現場への訪問と実習から 得られた問題意識を研究につなげ、 よりよい教育の実現を目指す

山梨大学教育学部 幼小発達教育コース 高橋英児研究室

さんは、若い親戚の子どもの面倒を見ることが好きで、子どもとかわる仕事を志望し、同コースを選んだ。

「幼稚園教諭と小学校教諭、2つの教員免許が取得できる点に魅力を感じ、本コースに入学しました」

1・2年次は、全学共通科目に加え、学部共通科目や教職系・教科系科目などの専門科目も学ぶ。学部の専門科目の中には、少人数グループワーク型基幹科目授業群が設置されている。例えば、1年次後期の「教育の現在」では、保育所や適応指導教室などを訪問した後、全コースの学生混合のグループで自分の気づきを話し合い、学校以外の場での教育の状況を理解する。

「家庭裁判所では、事件の審判だけでなく、犯罪を犯す恐れのある『虐待少年』の早期発見や支援をしていると聞き、学校以外の場で、子どもをどう

守り、育てるのかを学ぶことができました」（窪田さん）

また、全コースの学生が1年次から履修できる「社会参加実習（教育ボランティア）」や幼小発達教育コースの学生が1・2年次に履修する「継続観察実習」のように、低学年次から緩やかに教育現場にかかわりながら学ぶ実習系科目が設置されている（*2）。

同コース4年の若林初夏さんは、2〜4年次まで「社会参加実習」を履修し、甲府市内の公立小学校で学習支援のボランティア活動を行ってきた。

「実際に学校で活動し、業務の忙しさなど、教師の現実を知ることができました。また、不登校や発達障害などの課題を抱える子どもの状況を知り、教師として目指す教育は何か、深く考えるようになりました」（若林さん）

若林さんが2年次後期に履修した

「継続観察実習」では、半年間、隔週で同大学の附属幼稚園を訪問し、幼児の姿を観察した。

「観察後には毎回、保育者と話す機会があり、子どもの見取り方を具体的に学べました。その経験は、3年次の小学校での教育実習でも生かすことができました」（若林さん）

一人ひとりの多様性を認める 学校づくりを研究

3年次は、コース専門科目を中心に学び、後期には、複数の演習を履修して、4年次に所属する研究室を検討する。

窪田さんは、教育思想の研究を行う教授の演習も履修したが、実践的な研究をしたいと考え、教育方法を研究する高橋英児教授の研究室に入った。

「2年次にも高橋教授の授業を履修

目標の解説は
WebでCheck!



または、
HOME > 教育情報 > 高校向け >
コーナー別 記事一覧からお読み
いただけます。

<https://berd.benesse.jp>

* 1 幼小発達教育コース、障害児教育コース、言語教育コース、生活社会教育コース、科学教育コース、芸術身体教育コースの6つのコースと、山梨県小学校教員養成特別教育プログラム。 * 2 このほかに学部必修の実習系科目として、2年次の「介護等体験実習」「観察実習」と3年次の「教育実習」（前後期）がある。



写真1 10月に高橋英児研究室で行われた卒業論文の中間発表の様子。学生各々が、テーマに対する問題意識や章構成を発表し、テーマをどのように掘り下げていくか、その筋道を確認した。

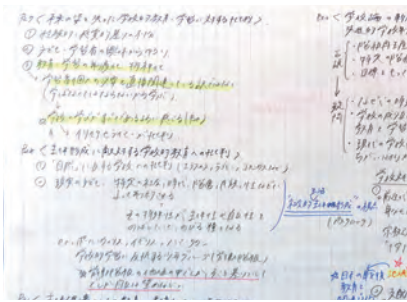


写真2 若林さんは、近代の学校の機能や役割、その根底にある子ども観に関する思想や議論を、文献を活用して整理している。ノートには、自分の意見や疑問も細かく書き込んでいる。

しましたが、その授業や演習も学生の対話を中心で、よりよい教育を主体的に考えさせる授業方針にも惹かれました」（窪田さん）

同研究室では、「目標4 質の高い教育をみんなに」の達成に向けて、子どもが「生きること」に夢と希望を持てるような教育の実現」を可能にする教育方法（教育課程、授業・学級指導、生活指導）の研究を行う。

個々の問題意識を大切に、高橋教授とゼミのメンバーが対話や討論をしながら、卒業論文のテーマを深めていく（写真1）。

窪田さんは、性の多様性に配慮した学校づくりをテーマに、卒業論文に取り組む（目標5）。性的マイノリティーの子どもが、現状の学校システムでは生きづらさを感じ、不登校になっている

ると知ったからだ。

「授業で性の多様性などを扱う学校は増えていますが、先行研究を調べても、システム自体を変えている学校は少ないです。例えば、性的マイノリティーの方は、学校のトイレを使う場合、男女どちらのトイレを使うか迷うことがあると思います。そこで、トイレの男女区別をなくしている海外の事例などを参考にしながら、多様性を認め合える学校づくりを研究し、ジェンダー平等の実現に貢献したいです」（窪田さん）

学校教育の変遷を整理し、 未来の教育のあり方を追究

若林さんも、高橋教授の研究室に入り、「学習指導要領に見られる能力観・

人間像と学校教育の役割」をテーマに研究中だ（写真2）。

「教育ボランティアや教育実習を経験し、一人ひとりの子どもの成長において必要な教育と、学習指導要領に示されている育成を目指す資質・能力との間にギャップを感じるがありました。目標4にもある、『教育の質の高さ』とは何なのかを考えたいと思いました」（若林さん）

学習指導要領には、社会の要請も込められているが、育成を目指す資質・能力がどのように変遷してきたのか、戦後の日本社会の転換期に焦点をあてて整理し、未来の子どもにどのような教育が必要なのか（目標16）、実習経験も踏まえて、考察していく予定だ。

「いざ学校で働き始めると、日々の授業で精いっぱいになってしまつて可能性も高いので、学生時代に、研究を通じて、自分がどのような教育を目指したいのか、教師としての土台を築きたいと考えています」（若林さん）

2人は、来年4月から小学校教師として教壇に立つ。

「子どもから信頼される教師になれるよう、頑張ります」（窪田さん）
「小学校の恩師にしてもらったように、子どもに寄り添える教師になりたいです」（若林さん）

学びとSDGs

経験に基づくと「問い」を設定し、対話で問題意識を掘り下げる



山梨大学大学院 総合研究部 教育学域 教育学系（幼小発達教育）教授
高橋英児
たかはし・えいじ

私の研究室では、学生自身が「なぜ、そのテーマを研究したいと思ったのか」、理由を深めることを重視しています。問題意識を掘り下げること、自分が大切にしたい価値観が明らかになり、自分が教育において社会とどうかかわっていきたいのか、見えてくるからです。1人で掘り下げることは難しいため、研究室では対話を重視し、仲間の意見を聞くことを通じて、多様な視点があることを学んでほしいと思っています。

やがて学生は、自分があたり前と思っていたことを疑い、それまでとは違う角度から調べるようになり、様々な事柄のつながりを見いだすようになります。例えば、小さな教室で起こっている出来事を、地域や社会の問題と結びつけて考えられるようになるでしょう。見方を変えることができたなら、課題を抱えた子どもと一緒に、その課題について考えたり、その子のつらさを分かち合ったりすることもできると思います。